

令和 3 年 6 月 10 日現在

機関番号：34419

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2020

課題番号：18H05582・19K20791

研究課題名（和文）現代中国の文芸一家 王嘯平、茹志鵬、王安憶の文学テキストの総合的検討

研究課題名（英文）A literary family in China : A comprehensive study of Wang Xiaoping, Ru Zhijuan, and Wang Anyi

研究代表者

松村 志乃 (MATSUMURA, Shino)

近畿大学・国際学部・講師

研究者番号：40812756

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は中国の著名文学者茹志鵬、王安憶ならびに英領マラヤ出身の王嘯平から成る文芸一家のテキストを総合的に検討するものである。まず1940年代から2000年代にかけて書かれた茹志鵬、王安憶のテキストにおける王嘯平像を検討し、共産主義の理想を胸に渡中した王嘯平の揺れ動くアイデンティティを明らかにした。そのうえで、日本でもよく知られる王安憶の散文と合わせる形で、王嘯平の散文を翻訳、紹介した。これまで20世紀半ばに共産主義革命のために渡中した南洋華僑の文学者は十分に検討されてこなかった。本研究は中国在住の家族という視点から、南洋華僑の文学者王嘯平の複雑な思想の多面的検討を行ったといえるだろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、国際シンポジウムでの報告や、論文と翻訳の著書出版という形で、より広く社会に問う機会に恵まれた。国際シンポジウムでは、王嘯平というほぼ無名の華人文学者を、現代中国の著名作家の家族のテキストから読み解くという手法が評価された。それを踏まえた拙論はより説得的に、従来中華人民共和国の文学の枠内で語られる茹志鵬や王安憶の新たな視角を提供したほか、「馬華文学（マレーシア・シンガポール華文学）」の研究成果としても評価され、マレーシアで出版される論文集への掲載が予定されている。総じていえば、本研究は従来の国民国家文学を超えようとする世界的な議論へわずかながら貢献したといえるだろう。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on immigrant Chinese writer named WangXiaoping, who is a husband of famous writer RuZhijuan. The purpose of this study is to speculate the texts of famous literary family which consists of 3 writers WangXiaopin, RuZhijuan and WangAnyi in a comprehensive way. The family member from the South Sea was examined from the images of WangXiaoping in the literary texts of RuZhijuan and WangAnyi from 1940s to 2000s. The paper reveals the restlessness of his identity since returning to the mother country. Additionally, the first Japanese translation of WangXiaoping's essay will be published in the process of my study. Chinese writers from Souse Sea who returned to China for the revolution have not been considered enough in Japan. This study will give the lights from different directions into the complicated thought of the communist writer from South Sea.

研究分野：現代中国語圏文学

キーワード：シンガポール華文学 馬華文学 中国当代文学 王嘯平 茹志鵬 王安憶

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、中華人民共和国の著名女性作家の茹志鵬(1925-98)、王安憶(1954-)並びに茹の夫で英領マラヤ(現シンガポール)出身の文学者王嘯平(1919-2003)のテキストを対象に、現代中国の歴史に翻弄されながら生きた文芸一家のテキストを、双方向的に解釈し、家族(夫婦)という視点から、1940年代から2000年までの中国語圏の文化と社会を検討しようとしたものである。

それまで申請者は、二世女性作家である茹志鵬・王安憶親子の文学を対象に、中華人民共和国建国期の1950年代から文化大革命・六四天安門事件を挟んだ1990年代中国の文学、文芸を研究してきた。本研究では従来までの研究をさらに深化するべく、茹志鵬・王安憶の視角のみならず、新たに茹の夫でシンガポール出身の演出家王嘯平を対象に加え、「家族(夫婦)」の視角から新中国の文芸と文化を考察しようと考えた。

近代以後、中国では家父長的家族制度は徐々に解体され、自由恋愛による婚姻と家族形成が進められた。中華人民共和国成立後は、家族成員の階級性が極端に問題視され、家族の存続自体が危機に晒された。自由恋愛、結婚、出産をめぐる家族の価値観が大きく変化中、南洋出身の王嘯平は共産軍の戦友だった茹志鵬と結婚し、家庭を成した。そして中国革命によって結ばれた夫婦の間に、知識青年世代の王安憶が誕生した。

王嘯平は共産主義に共鳴し、英領マラヤから母国へ「帰国」した文学者である。彼は妻子が著名作家だったにもかかわらず、長らく忘れられた存在だった。それは王嘯平が中華人民共和国の文学史からも、1960年代に誕生した新興国家シンガポールの文学史からも逸れた存在と見なされたためであった。だが王嘯平の死後、王安憶によって逸書が発表され話題を呼んだ。一方、米国では王徳威が国民国家の枠組みを超え華人に中国語著作を総体として捉える「サイノフォン文学」を提唱し、台湾ではマレーシア・シンガポール華僑の中国語創作「馬華文学」が注目を集めた。王嘯平は今日そのどちらからも言及されるようになり、世界的な研究動向からみても、再検討される時が来たと考えられた。

1950年代の茹志鵬は、反右派闘争で失脚した夫を支え、三人の子を出産しながら創作に励んだ。60年代にはその家庭的、女性的な作風が批判の対象となるが、文革後には第二の創作期を迎えた。茹志鵬研究は多数あるが、女性的、家庭的な作風とされながら、作品における夫像については検討されてこなかった。王嘯平研究を進めると同時に、茹志鵬・王嘯平が互いに伴侶をいかに書いたかを検討すれば、共産主義の理念で結ばれた夫婦の様相と共に、建国期の社会と文化の様相が明らかになると考えられた。

一方、文革後にデビューした王安憶は、海外華僑の父を謎深き存在として書いてきた。六四天安門事件後は知識人の母親を描きながら、上の世代への尊敬と失望の思いを書いてきたが、王嘯平死後は父について言及している他、『啓蒙時代』(2007)では知識人の父について触れている。知識青年世代の王安憶の視角から王嘯平を検討することで、より多角的に家族像を検討することができるかと期待された。

## 2. 研究の目的

本研究は、茹志鵬、王嘯平夫婦及びその子王安憶の文芸を対象に、家族(夫婦)という社会的、身体的に結びついた単位から現代中国の文化と社会を検討するものである。本研究の目的は、1、海外華僑の革命者・文学者である王嘯平研究の基礎を構築し、その精神的営為を「サイノフォン文学」の中で位置づける点、2、王嘯平・茹志鵬・王安憶のテキストに描かれる家族(夫婦)像を双方向的に検討することで、新中国のひとつの知識人家庭像を明らかにする点にあった。以下具体的に説明したい。

### ① 王嘯平・茹志鵬・王安憶テキストにおける家族像の検討

これまで茹志鵬、王安憶に関する研究は多く行われてきたが、茹志鵬と王安憶のテキストを双方向的に解釈、検討したのは筆者だけであり、特にほとんど無名の夫(父)王嘯平を含む家族の視角から、双方向にそれぞれの家族像が検討されることはなかった。そこで本研究は、「新中国」二世文学者の茹志鵬・王嘯平・王安憶に着目し、それぞれのテキストから家族像を検討する点にある。つまり「新中国」の建国の歴史と政治に密接に関わりながら創作を続けた三名の文学者を、「新中国」建国の歴史を負わされた知識人を家族という視角から検討しようとするものであった。

### ② 王嘯平についての基礎研究の構築と「サイノフォン文学」における位置づけの検討

建国後の王嘯平は劇作家として上海で活躍し、反右派闘争で失脚して以後も劇作家・演出家として過ごし、名誉回復後の80年代には自伝的長篇小説を出版した。だが王嘯平については、香港で出版された「馬華文学体系」に戯曲等が紹介されているだけで、これまでの中国の文学史・

演劇史では全く言及されてこなかった。

そこで本研究のいまひとつの目的は、まず劇作家・演出家王嘯平の脚本、随筆、小説ならびに当時の話劇上演に関する資料を、シンガポールや上海で可能な限り収集して王嘯平研究の基礎を打ち立てることにある。さらにその独自性は近年話題になっている「サイノフォン文学」、「馬華文学」というタームの中で、先駆者となる王嘯平がいかなる位置づけができるかを今日的意味において検討する点にあった。

### 3. 研究の方法

王嘯平・茹志鵬・王嘯平文学テキストにそれぞれ伴侶や両親といった家族がいかに書かれたかを検討するために、それぞれの著作における家族像を洗い出しまとめた。これまで王安憶文学における母親と茹志鵬文学における子どもについては検討したので、本研究では主に、茹志鵬、王安憶のテキストに王嘯平(夫・父)がいかに描かれたのか、そして王嘯平のテキストに茹志鵬(妻)がいかに描かれたのかを明らかにした。

また王嘯平については基礎研究がほとんど行われてきていないので、王に関する資料を国内外(上海やシンガポールを含む)で可能な限り収集した上で通読し、情報を整理して、研究の基礎を築こうとした。さらにアメリカの「サイノフォン文学」や台湾の「馬華文学」に関する議論を通読し、その今日的意義を理解したうえで、先駆者としての王嘯平の位置づけの検討を試みた。

### 4. 研究成果

上述したように、本研究の方法のひとつは、3人の作家の1940年代から2000年代にかけてのテキストを、それぞれの国家、歴史、生活の価値観をめぐる対話と応答の記録であるとみなし、各人のテキストを双方向的に読み、文芸一家の視点、ひいては中国当代文学の視点から位置付けることにあった。もうひとつは、王嘯平を「馬華文学(マレーシア華文学・広義のシンガポール華文学を含む)における現代的な位置づけを検討するものであった。本研究は、まず前者において成果を挙げている。

2019年東京で行われた日本中国当代文学研究会主催の国際シンポジウム「莫言研究日中研究者東京シンポジウム」では、主にノーベル賞作家莫言についての研究成果を報告するものであったが、筆者はその他当代文学研究の最新の動向の一つとして「文芸之家中的王嘯平——從王安憶和茹志鵬的角度出發(文芸一家の中の王嘯平--王安憶と茹志鵬の角度から)」という報告を行った。シンポジウムの席上では、茹志鵬、王安憶単体の研究は多く行われているが、王嘯平というほぼ無名の家人作家の文学者を、著名作家の家族のテキストから読み解くという角度がこれまでにはなかったものであるとの評価を得た。

この報告の成果は、「南洋華僑の家人——茹志鵬、王安憶から見た王嘯平」というタイトルで『夜の華——中国モダニズム研究会論集』に掲載され、2021年3月に出版された。学術雑誌ではなく、より広い読者層が想定される書籍の形で世に出ることで、研究の社会的還元という観点から見ても、成果を挙げたといえるだろう。当該論文は現在、中国語に翻訳の上、マレーシアで出版される研究書に掲載が予定されており、研究成果がよりひろく中国語圏世界に知られることが推測される。

また翻訳集『中国が描く日本との戦争(仮題)』(未刊)に、王嘯平のエッセイ並びにそれにまつわる王安憶のエッセイを寄稿した。諸事情により刊行が遅れてはいるが、こちら書籍の形で来年度には刊行が予定されている。本書が刊行された暁には、英領マラヤ(シンガポール)と中華人民共和国という二つの土地を越境しながら文学者として生きた王嘯平を、日本語文献によってより広く社会に知らしめることができるであろう。

一方、王嘯平当文学者の「馬華文学」における位置づけは、コロナ禍でシンガポール・マレーシア現地にほとんど訪問できず、資料の収集や、現地の研究者作家との交流が妨げられたために十分には進まなかった。手元にある資料で王嘯平の長編自伝三部作を足掛かりに王嘯平の「馬華文学」における位置づけを検討する報告は年度内に行う予定だったが、諸事情により、年度をまたぐ形で2021年5月の当代文学研究会例会で報告する予定である。また本報告をまとめた論文は9月に近畿大学国際学部紀要『Journal of International Studies』への寄稿がすでに決まっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 松村志乃	4. 巻 92
2. 論文標題 「茹志鵑最後の小説「前へ、前へ」試論」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『現代中国』	6. 最初と最後の頁 107-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 松村志乃
2. 発表標題 文芸之家中の王嘯平 從王安憶和茹志鵑的角度出發
3. 学会等名 莫言研究日中研究者東京シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松村志乃
2. 発表標題 「上海と「人民文学」 王安憶と茹志鵑を中心に」
3. 学会等名 日本現代中国学会2018年度関西部会 共通論題「改革開放40年と上海」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松村志乃
2. 発表標題 「現代中国の文芸一家 対王嘯平、茹志鵑、以及王安憶文学的総合研討」
3. 学会等名 武漢大学・神戸大学共同研究「理解・曲解・和解 境界線内外の「人」與「文」」（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松村志乃
2. 発表標題 「文学の視点から『繁花』を読む 王安憶文学との比較を中心に」
3. 学会等名 グローバル・コミュニケーション学会学術講演会、神戸学院大学・神奈川大学「海とみなと」コンソーシアム学術フォーラム「都市・文 革・文学 小説『繁花』とその時代」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松村志乃
2. 発表標題 「文化大革命後の中国の農村文学 帝国内部で「帝国」を見る視点として」
3. 学会等名 第五回国際学術ワークショップおよび学術交流「20世紀東アジアにおける帝国と文学」(国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 神谷まり子, 大東和重, 齊藤大紀, 福長悠, 中野徹, 中村みどり, 田中雄大, 城山拓也, 杉村安幾子, 中野知洋, 池田智恵, 奥野行伸, 大野陽介, 松村志乃, 高橋俊	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中国文庫	5. 総ページ数 450
3. 書名 『夜の華 中国モダニズム研究会論集』	

1. 著者名 日本中国当代文学研究会編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 中国文庫	5. 総ページ数
3. 書名 『中国が描く日本との戦争(仮題)』	

1. 著者名 松村志乃、藤井徳弘、星名宏修、中野徹、高橋俊、上原かおり、津守陽、阿部沙織、大野陽介、河本美紀、豊田周子、趙文青	4. 発行年 2018年
2. 出版社 研文出版	5. 総ページ数 424
3. 書名 『中華文芸の饗宴 『野草』第百号』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------